

ドイツの「森の幼稚園」

— その 20 年後 —

Waldkindergarten in Deutschland

— Nach 20er Jahre —

百合草 禎 二

YURIKUSA Teiji

I、はじめに

「森の幼稚園」という名称は、日本において確実にその地歩を固めている。日本で話題になったのは、1999 年に日本経済新聞に掲載された記事（「すくすく森の幼稚園」4 月 25 日）でなかったか。そして「森の幼稚園」の教育学的意義について、最初に注目し、現地へと足を運び、その意義を論じたのは、恐らく大場幸夫（2002.7.28）でないかと思う。また筆者は、大場先生の研究に触発され、またドイツにおける Hans-Georg Schede(2000), Ingrid Miklitz(2001), Kirsten Bickel(2001) らの研究を参考に、「ドイツの『森の幼稚園』の実践と子どもの発達—森の中で育つ子ども—」（百合草 2002）の拙論を発表した。

その後、日本では「ドイツ森の幼稚園」についての言及が確実に増え、とくに 2009 年前後から広島大学大学院教育学研究科附属幼年教育研究施設では実践的な検討を積極的に行っている。例えば、「自然体験を通じた幼児の「育ち」と「学び」に関する検討」（杉村・岡花・浅川・財満・松本・林・上松・落合 2009）、「森の幼稚園カリキュラム」における幼児と自然との相互作用に関する研究— 他者とのかわりにみる幼児の変容プロセス—（中西・中坪・境、2010）、「アフォーダンスの視点から探る「森



の幼稚園」カリキュラム—素朴な自然環境は保育実践に何をもたらすのか—」中坪・久原・中西・境・山元・林・松本・日切・落合、2011）などである。また東方真理子（2004, 2004, 2005）、佐藤史浩・磯部裕子（2010）らによって現地での視察や参与観察を通しての考察がなされた。

また「森の幼稚園」の名称を巡って、「もりのようちえん」とする民間の運動も活発である。なぜ「森の幼稚園」でなく、ひらがなの「もりのようちえん」かと言えば、恐らく「森」に拘らず、また既存の教育施設としての「幼稚園」に拘らず、子育て環境全般を議論したいというスタンスをとっているからであろうと推察する。勿論、そのスタンスは納得できるとしても、結果として、本来の「森の幼稚園」の実践の教育学的・心理学的意義が曖昧になってしまい、結局、今日の幼稚園教育の在り方を問うという姿勢すらも失われてしまう可能性があるかと危惧している。筆者は、明確に対象規定をすることによってのみ、その実践を正面から検討することができるのではないかと考える。

本稿では、ドイツにおける「森の幼稚園」の実践を再度検討し、その教育学的・心理学的意義を再確認をしたいと考える。

II、ドイツにおける「森の幼稚園」の歴史

ドイツの「森の幼稚園」が、デンマーク国境近く、ドイツの Schleswig-Holstein 州のフレンスブルク（Flensburg）に、K.Jebsen と P.Jäger によって開設されたのが 1991 年であり、公認されたのが 1993 年である。その公認された年から数えて、今年で 20 年が経った。フレンスブルク「森の幼稚園」のホームページにおいて、以下のようなメッセージを送っている。「森の幼稚園フレンスブルクは、20 年を迎えた。フレンスブルク森の幼稚園は、ドイツにおいて最初に公式に認可された森の幼稚園である。子ども達は、定まった家をもっていないが、4 時間から 5 時間、自由な空の下で運動をする。幼稚園にあるのは、森に隣接した小さな庭のコロニー“静かな愛”の中にある、小さな小屋である。その小屋は、極端な天候状況（嵐、雷雨、かなりのマイナス温度）に使われる。」

勿論、ドイツ国内にあって最初の「森の幼稚園」と称する保育施設は、すでに 1968 年にヴィースバーデン（Wiesbaden）において開設されている。またヴィースバーデン（Wiesbaden e.V.）の森の幼稚園のホームページでは、ドイツにおける最初の森の幼稚園と標記されている。

しかし正確を記せば、ここでドイツにおける「最初」の「森の幼稚園」というのは、公的に認可を受け、公的資金を助成された幼児教育施設であるということである。この成立の背景について、ドイツの「森の幼稚園」を教育学的視点から纏め、出版したミクリッツの著書から引用すれば、以下のようなものである。「ドイツでは、ウルスラ・ズーベ（Ursula Sube）が、30 年ほど前に、ヴィースバーデンに最初の森の幼稚園を作った。1968 年の春、幼稚園が公的認可を受けた。しかしウルスラ・ズーベは、教師としての専門教育を受けていないので、公的資金は投入されなかった。資金調達は、もっぱら両親たちの分担金で行われた。グループには、いつも 15 人の子どもがいた。ズーベ婦人は、デンマークの森の幼稚園の存在について何も知らなかった。従って、彼女らのモデルから、より発展したイニシアティブは生まれなかった。

1991 年に、駆け出しの教師であったケスティン・ジェブセンとペトラ・イエガーは、ある専門雑誌—訳註：雑誌の名称は、「遊びと学習（Spielen und Lernen）」—デンマークの森の幼稚園についての一つの論文を読んだで、実際は、その中に掲載された小さなコラムである一次頁に掲載）。その記事の

ドアと壁のない幼稚園

「遊びと学習」4/91

どんな天候でも子ども達は外にいる。

デンマークでまったく特別な方法の施設について、ウーズラ・フリードリッヒが報告している。

子ども達は手をつなぎ、円になる。長靴を履き、額には大きなフード、背中にはリュックサック、子ども達は歌をうたい、歌のリズムに合わせて長靴やフード、リュックサックを揺り動かす。雨は小さな鼻の上に落ちる。

森の幼稚園の子どもにとって、それは特別なことではない。毎朝9時に直接北のコペンハーゲンの森の外れにある電車の駅に集合し、毎日夏は4時間、冬は3時間、自由な空の下で過ごしている。

子ども達は森で体力や手先の器用さを試したり、走ったり、根っこの上を飛んだり、長い木の幹でバランスをとったり、木に登ったり、茂みの中へ隠れたりすることを共に体験することが喜びである。努力とやる気が子ども達の顔にあふれている。騒ぎ回るのはおながやすく。彼らのリュックサックの中にはすべての食べ物が詰め込まれている。子ども達はヒュッチも机もいすも必要としない。子ども達は切り株の上に座り、バターのパンや果物、飲み物を味わう。そして15人の子どもたちが鬼ごっこや、かくれんぼをしたり、ジャガイモの皮むき機で小さな棒を作ったりするときには、紙やごみは雑然に置かれていない。子どもたちは自分たちの森に気を配っている。

保育者がその後、鐘を鳴らすと子どもたちは何を意味しているのか、すべて理解している。すぐに子どもたちはとても静かに円になって座り、保育者が語っているメルヘンに耳を澄まし、そしてそのあと家路へと向かう。

子どもたちは森を知っていて、道や場所をよく理解している。どの場所で待たなければならないか知っていて、全員再び集まる。帰りの歌が歌われると幼稚園の時間が今日は終わりだということを最年少は2歳半そして最年長は6歳の子どもがそれぞれ理解する。お父さんやお母さんは子どもたちを待っている。子どもたちはかなり汚れ、そして疲れてやってきて、目は光り輝き、いつものように森から何かを持っていく。

多くの子どもたちは風、雨または寒さの中で外にいるときに感じる感覚を今日ではまったく知らない。彼らは長い時間、車の中やテレビの前に座り、幼稚園の中にいる。

「子どもたちに自然を与えれば、子どもたちはファンタジーを使うでしょう。」

ウーラとブリッジは言う。彼女らはシュタイナーの教育学者で森の幼稚園を進めている。森の中ではプラスチックのおもちゃやコンクリート立ての場所にクライングルूमはいらない。子どもたちは自然、彼らの成長、彼らの体型、色を経験している。

5年間私は家族とコペンハーゲンから北へ行った所に住んでいた。二人の子どもレーナ、今5歳半、とアーネ4歳はそこで生まれた。二人は森の幼稚園に通っていた。レーナは3歳になったばかりで、アーネは2歳だった。

私はよく質問された：雨の日、子どもたちは何をしている？寒さや雪のときはどうなのか？子どもたちは病気になるのだろうか？

私は伝えた：3時間から4時間毎日、子どもたちは外にいる；子ども達は病気にかからず、適切な洋服と丈夫な靴を身に着けている。雨の中や寒さの中、外にいることは子どもたちにとって何でもないことである。もちろん時々鼻かぜが出ることもあるけれど、子どもたちはほとんどひどい病気にはならず良い状態を保っている。森では温めすぎている部屋の中のように細菌が活動することはない。

私たちが再びドイツに住むようになってから、子ども達は普通に園庭をもうけた一般的幼稚園へ行っている。雨の日でも子ども達は中で過ごしている。

幸せなことに私たちの玄関の前には登ることができる木と牧草地という自然がある。野原や森も遠くではなく、私たちはよく自転車で出かける。そして森の幼稚園でのとてもすばらしい日々の思い出にひたる。

中で報告された情景は、(現状に満足できず、何か新しい試みはないかと考える一記者加筆) 彼女らのアルターナティブな思いと一致した。彼女らは、デンマークで聴講し、ある構想を発展させ、一つの会を結成した後で、彼女らは、役所を徐々に説得することができた。1993年に、最初のドイツ国家に公認された森の幼稚園が、フレンスブルクに開設された。フレンスブルクの森の幼稚園の徹底的な広報活動と多くの訪問者によって、その考えはますます広がった。」(Miklitz Ingrid ,s.4)

さらに正確を記して述べるなら、「森の幼稚園」の「生みの母」は、Ella Flatau という人で、1956年頃にデンマークのゾーレン・ロートにおいて開設されていた。子ども達の親の主導による保育実践であった。その経緯は、ミクリッツによれば、Flatau 婦人は、毎日、自分自身の子どもを連れて森に出かけていた。幼稚園の場所は、あまりなかったもので、親たちが、この森の中で育てるという新しい考えが気に入り、近所の親たちは、自分の子ども達を Ella Flatau の世話に託した。そしてまもなく他の親たちが、仲間に加わり、これらの親たちの協力から、最初の「森の幼稚園 skovbørnehaven」(訳註：デンマーク語でスコフボーネヘーベという。skov が「森」、børne が「子ども」(barn の複数) のことで、haven が「庭」のこと、つまり文字どおり、森の幼稚園) が誕生したと言われている。デンマークで生活していた筆者の同僚の話でも、弟さんがそういう幼稚園に通園していたと聞いたことがあるし、また湯沢雅彦による『少子化をのりこえたデンマーク』(2001) の中でも、「時々アスファルトの道路に出ると、別の幼稚園や保育園が。」「森の幼稚園」と呼ばれるのはこういう園をさすのだろう。10分に一カ所はあって、さすがに多いなと思う」(161頁) という記述があり、デンマークではドイツよりも

より早く実践が行われていたことが想像される。

さて、公認されてから20年が経ち、「森の幼稚園」がドイツ国内で、どのように発展し、拡充したのかということは、非常に興味深いことである。なぜなら、その後の経過によって実践の真価が問われるからである。また日本の「ゆとりの教育」への批判に端的にみられるように、その間に行われた、例えば、OECDの加盟国での国際的な「学力」の調査の公表によって、その結果に一喜一憂し、新しい実践の行く末が左右されないからである。

因みに、田中信世（国際貿易投資研究所 研究主幹）による報告「ドイツのPISA試験のショック」（2002年4月18日「フラッシュ35」）によると、ドイツの結果は深刻なものだったらしい。「この2000年PISA調査で、ドイツは参加32カ国中、「読解」（総合能力）で21位、「数学」と「科学」でそれぞれ20位という不本意な結果が明らかになったのである」。トップを走る日本と比べたら確かに低い。またいつも真ん中くらいに位置するアメリカと比べてもかなり低い。そこでドイツ国内では2002年の「1月、ベルリンで開催された「教育フォーラム」の最終会合での演説の中で、ブルマン連邦教育研究相は、「PISA調査の結果は（ドイツの教育に）警告を発するものである。政治経済的に主要な地位を占め、教育国家としても国際的にトップグループ入るドイツが（PISA調査で）OECDの中で中庸の地位、ましてやそれ以下の地位にとどまるということはあってはならないことである」と述べており、ドイツ国民、なかでもドイツ政府が今回のPISAの調査結果に大きなショックを受けていることを物語っている」。これがドイツの教育制度の改革に拍車をかけるきっかけとなっていると報告されている。

Ⅲ、「ドイツ森の幼稚園」とは何か？

(1) 「ドイツ森の幼稚園」つまり、「ドアと壁のない幼稚園」とはどのような事を指すのであろうか。

「森の幼稚園」とは、ドイツ語でヴァルトキンダーガルテン（Waldkindergarten）と呼称する。また「自然の幼稚園」（Naturkindergarten）とも言われ、園によっては、Waldであったり、Naturであったり、どちらかを使っている。要するに、基本的には自然空間の中で保育をするということである。しかし、その名称の副題に、「ドアと壁のない幼稚園」（ein Kindergarten ohne Türen und Wände）と書かれている。ここで言う「ドアと壁のない」とは、一体どういうことを言うのか。「森の幼稚園」を理解する上で、この副題を理解することは、重要なことでないだろうか。

「ドアと壁のない」（ohne Türen und Wände）というのは、何を象徴しているのか、幾つかの「森の幼稚園」のホームページから明らかにしていこう。

最初に、「森の幼稚園ウルム」（Waldkindergarten Ulm.e.V）のホームページによると、「ドアと壁のないというのは、遊び、感じ、聞き、見る、嗅ぎ、笑い、よじ登り、休息する、工作し、踊り、夢見る、自由であるための空間である。」とし、自由な空間の下、様々な五感を屈指しながら、活動を可能とする空間であると簡潔に表現している。

また「森の幼稚園ビュルツブルク」（Waldkindergarten Würzburg.e.V）のホームページでは、下記のように述べている。

「ドアと壁のない幼稚園、この考えの源泉は、デンマークにある。・・・自由な空の下にある幼稚園では、すべてが森の中で行われる。子ども達は、そこで走り、遊び、制作する・・・。

定まった家はない。なぜなら、子ども達は、風雨でも外にいるからである。ただ、嵐や雷雨のような、

極端な天候のために、避難用の小屋や＜建築車 (Bauwagen)＞がある。さらに挙げれば、不都合な天候はなく、問題があるとしたら、不適切な服装ぐらいである。

全ての子どもは、雨が降っていようと、雪が降っていようと、日が照っていようと、野外に追いやられる。そこには常にすることがある、水たまりでピシャピシャやり、砂遊びをし、滑走路を作り、藪を駆り立てたりする。寒さや湿気の不安はないし、通常の場合、風邪をひくことはない。なぜなら外で遊んでいるからである。自由にはしゃぎ回することは、落ち着きを損なわないで、食欲や眠りを調節する」と。ここでは、この種の実践の源泉が、デンマークにあるとしている。恐らく、先に記した、Ella Flatau によって 1956 年頃にデンマークのゾーレン・ロートにおいて開設されていた「森の幼稚園」を指している。雨の日も風の日も森の中で過ごすということが強調され、そのことが身体の健康にとって重要であるとしている。

さらに、「森の幼稚園イエーナ」(Waldkindergarten Würzburg Jena.e.V) のホームページでは、「森の幼稚園」の構想は、デンマークに由来する。20 年来成功裏に適用されている。あらゆる「森の幼稚園」の基本的考えは、以下の通りである。

子ども時代を楽しむためのもっとも美しい場所は、おそらく自然だろう。私たちは、子どもが、自然に近い、全体的な発達を可能とさせたい。「ドアと壁のない」空間としての森は、全ての子どもに自由に、運動し、笑い、泣き、踊り、夢見る、言葉の本当の意味で「子どもの存在」の為の十分な場所を提供する。

子どもは、自然の中に組み込まれて、相互依存の中で体験する。自然の、つまり天候の変化や季節の移り変わりという、直接的な体験は、あらゆる感覚をともなった固有の経験によって、“第二の手からの投影”に代わって、自己価値感情や安定性を与える。これらは、社会で、建設的に、創造的に参加するための基礎である」と述べている。

ここでは、「子ども時代を楽しむ」ための「美しい場所」は、「自然」であるとし、自然という全体的な世界の中で子どもの全面的発達を促すことができる。そして自然の中の直接的な体験が、「相互依存」という関係の中で、自尊感情や安定感を育み、それがその後の社会的活動を可能とする上での基礎となるとしている。

(2) 「森の幼稚園」の実践 — 「森の幼稚園」の一日 (Der Tag im Wald)

筆者たちは、ここ 10 年間の間に多くの「森の幼稚園」を訪ねた。例えば、Augustsburg Waldkindergarten、Waldkindergarten Aubinger Lohe e.V.、Evangelischer kindergarten haustetten schatzkiste und Waldkindergarten などミュンヘンやアウグスブルクなどを中心に見学した。どこの「森の幼稚園」を訪ねても、実践の形式はほぼ同じで、「森の幼稚園」とはこういうものかと納得できた。勿論、形態としては正統的な「森の幼稚園」と統合的な「森の幼稚園」などを垣間見ることができた。例えば、アウグスブルクにある Augustsburg Waldkindergarten やミュンヘン近郊にある Waldkindergarten Aubinger Lohe e.V. などは正統的な「森の幼稚園」であり、一日中(勿論、4・5 時間であるが)森の中で過ごす園であり、その一方、Evangelischer kindergarten haustetten schatzkiste und Waldkindergarten は統合的な「森の幼稚園」で、森の中で保育するグループと街中の既存の園舎の中で保育をするグループの二つを同時に併存している園である。

さて、森の中ではどのようにして過ごすのだろうか？またどのような実践が行われるのだろうか？こ

こで訪問先の「森の幼稚園」から頂いて資料や Web に掲載された HP から確認してきたい。

ドイツ国内で最初の「森の幼稚園」として採り上げた Waldkindergarten Flensburg.e.V から引用しよう。

「二人の女教師と一人の実践者の三人でチームを組み、3歳から6歳までの子ども、約20人くらいの集団が組織される。マーリエンヘルツンクと呼ばれるフレンスブルクの都市林（Stadtwald）に9時に集合する。親たちは、色々な交通手段を使い一乗り合い的な送迎（Fahrgemeinschaft）を行っている、集合場所へ連れてくる。子どもの送迎の際に、両親と教員との情報交換を行い、子どもの発達の状況などを伝える。その後、砂場に集まり、朝の集まり（Morgenkreis）をする。歌を唱いながら、挨拶をし、子どもの様子を観察し、集いの遊びを行う。朝の集いの後、子ども達は、小さなリュックサックをもって、森への行軍を始める。大体、1～2キロぐらい歩く。子ども達は、至る所で遊びながら、ゆっくり進む。遊びに利用するための色々なものを見つける。例えば、木ぎれ、石、草、苔、卵の殻、ブナの実、ドングリ、樹皮などである。朝食の時間が来ると、そのための適切な場所を探し、太陽が照っている時には、日溜まりへ、雨模様の場合には、木の下などの雨を避けることのできる場所へ、あるいは軽いパラソルを広げる。強い雨の時とか、非常に寒い時には、避難小屋（Hüte）で食事をする。食事は、輪になって、リュックサックの上に腰をかけ、健康によい、残さず食事を頂く。食事の後は、子ども達は、自由遊びの時間がある。

子ども達は、鐘がなると、教師によって冒険が語られることを知っている。子ども達は、自然に出来た舞台の前に、半円になって座り、物語に耳を傾ける。自然の素材から形づくられた人形は、森の大地の上で非常にマッチしながら、子ども達のファンタジーを刺激する。子ども達が、非常に長時間集中して聞き入っている。教師が、物語（“いばら姫”、“甘い粥”など）を最後まで話し終わると、二三の子どもは、芝居を演じることができる。

帰りの集い（Abschlusskreis）には、遊びの輪を作り、終わりの歌を歌う。このようにして3時間と4時間後に親が遊びの広場に迎えにくる。」

また Evangelischer kindergarten haustetten schatzkiste und Waldkindergarten では、以下のようなスケジュールで「森の幼稚園」の一日が経過する。

- 8.45 子ども達は、森の中の「集合場所」へ送られてくる。
- 9.00 両親は、別れを告げ、我々は挨拶の歌と祈りでもって始める。それが済むと手押し車を押して出発する。
- 9.20 第一停留所（いわゆる休憩所）あるいは第二停留所で、輪になって遊んだり、指遊びをしたりする。
- 9.40 おやつの時間（リングの時間）。時には、ちょっとした物語やお話をしたりする。
- 10.00 我々は、場所（基地）に到着したら、自由遊びの時間。天候やその日のプログラムに従って、自由遊びの時間に多くの活動あるいは工作が提供される。
- 10.30 おやつの時間。その前に手を洗い、指遊びや祈りを捧げる。
- 10.50 子ども達は、各自おやつを食べたら、遊び始めたり、工作などをする。
- 12.00 道具が集められ、全ての子どもが片付けを手伝う。
- 12.20 絵本の鑑賞、物語、輪になって遊ぶ事が、停留所で時間や子どもの提案に従って組み込まれる。

12.50 我々は、再び、待合場所へ行き、両親が子ども達を連れて帰ります。

以上の事例の紹介から、大凡の保育の活動内容が理解できただろう。纏めれば、大凡、朝から昼食までの4時間から5時間を森の中で過ごす。保育者は、2人～3人で、子どもの数は、15人～20人くらいで小規模な集団である。例外に漏れず、朝の集いと帰り集いがあり、既存の園と同じように、歌あり、物語あり、ちょっとした出し物が行われる。「森の幼稚園」の中で最も大切なのは、自由時間に彼らが営む活動にある。この五感を使う活動の中に、既存の園舎のある幼稚園の実践との違いがあると考えられる。

(3) 「森の幼稚園」の教育理念

ドイツの「森の幼稚園」のHPに、各園の教育理念が掲げられている。この教育理念を通して「森の幼稚園」とは何を理解する上での重要な情報の一つを与えてくれる。

もっとも有名な教育理念として、必ずと言っていいほど各園で引用する教育理念の一つに、Waldkindergärten Flensburg e.V.の教育理念がある。それは、“*Gebt den Kindern die Natur, so benutzen sie ihre Phantasie*”（「子ども達に自然を与えよ、そうすれば彼らは、自らのファンタジーを使うであろう」）といスローガンである。恐らく、この園を開設したケスティン・ジェブセンとペトラ・イエガーが、デンマークでの実践を報じた雑誌の記事の中に登場してくるフレーズである。シュタイナー教育の影響を反映しているとの事である。もう一つの教育理念は、“*Spielzeug zerbricht – Erlebnisse sind unsterblich*”（「おもちゃは壊れる、しかし体験は永遠である」）である。このスローガンは、Augustsburg Waldkindergartenのもので、人工的なものとしての「おもちゃ」は、壊れるが、自然のなかで体験することは、永遠に子どもの中に生きるということであろう。スローガンの中で唄われている「ファンタジー」と「体験」の概念は、今日の教育界において求められている視点である。ミヒェル・エンデは、2000年にNHKでの対話（彼の遺言となった）において、現代文明社会において失われつつある“ファンタジー”の「未来を見通す力」の重要性を主張していた。

「ファンタジーとは現実から逃避したり、おとぎの国で空想的な冒険をすることではありません。ファンタジーによって、私たちはまだ見ない、将来起こる物事を眼前に思い浮かべることができるのです。私たちは一種の予言者的能力によってこれから起こることを予測し、そこから新たな基準を得なければなりません」（河邑厚德＋グループ現代『エンデの遺言―「根源からお金を問うこと―」NHK出版2000）。

昨今、様々な事故を前にして、「想定外」の事故であると口々に言い、ある種の責任逃れをしている。しかし果たして「想定外」なのであるのか、どうか。それは「想定外」ではなく、「想定する」力の欠如がもたらした結果ではなかったか。自然は常に想定外である。想定外であることを想定する力こそが求められていると言えるのではないか。

IV、「森の幼稚園」の発展

ドイツにおける「森の幼稚園」が開設されてから、今年で20年が経過したことはすでに述べた。この20年の間に「森の幼稚園」は、量的にはどの程度発展したのであろうか。

フレンスブルク森の幼稚園が開設されてから、10年後に出版された、ミクリッツによる『森の幼稚園—教育学的原則の次元—』（1991）の中で言及されていることによると、「90年代半ば以来、さらに森の幼稚園は開設され、部分的には教育学の専門誌で非常に論争的な議論が引き起こされた。今日では、およそ200のこのような施設がドイツにはある」と述べている。また1996年に結成された＜自然幼稚園のドイツ連邦サークル＞（Bundesarbeitskreis der Naturkindergarten in Deutschland）の発展して、2000年10月に連邦連合（Bundesverband der Naturkindergarten in Deutschland）となった団体の作

成しているリストでは、400近い「森の幼稚園」が存在していることが明らかにされている。さて、＜自然幼稚園のドイツ連邦連合＞のリストによると、以下のような増減をしている。

2001年 394カ園
2009年 599カ園
2012年 531カ園
2013年 650カ園

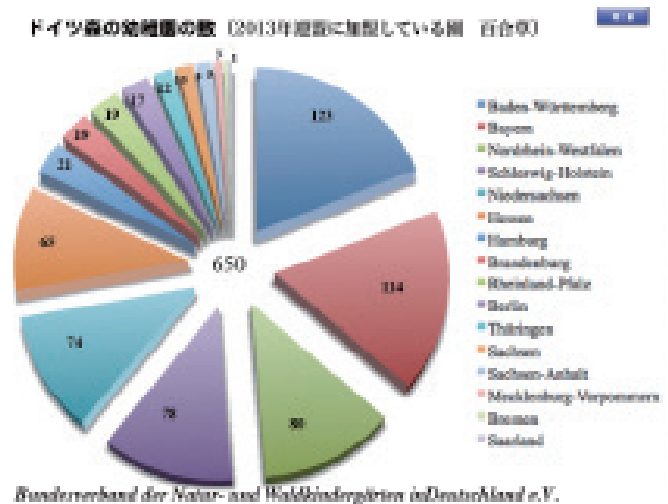
この結果から、ドイツ国内における「森の幼稚園」の開設数は、全体としては増加の傾向にあると言えるであろう。

州単位でみると、最も多い州は、バーデン＝ヴュルテンベルク州（Baden-Württemberg、Stuttgart、人口10.786.227）である。ドイツ3番目に大きい州である。次が、バイエルン自由州（Freistaat Bayern、München、人口12.595.891）であり、ノルトライン＝ヴェストファーレン州（Nordrhein-Westfalen、Düsseldorf、人口17.841.956）の三大都市に集中

しているが、さらにニーダーザクセン州（Niedersachsen、Hannover、人口7.913.502）、ヘッセン州（Hessen、Wiesbaden、人口6.092.126）、シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州（Schleswig-Holstein、Kiel、人口2.837.641）などの大都市に集中している。ヘッセン州は、ドイツで無認可であるが初めての「森の幼稚園」が開設されたビースバーデンがあるし、シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州には、



ドイツで初めて認可されたフレンスブルク森の幼稚園の所在地である。逆に少ない地域は、ザールランド、ブレーメンやベルリンなどの極めて小さい州が挙げられる。それ以外では、北西部の州、ブランデンブルク州、ザクセン＝アンハルト州、メクレンブルク＝フォアポンメルン州は、極めて「森の幼稚園」の数が少ない。面白いことに、これらの州は、もともと東ドイツに所属する地域である。このことは、政治体制による保育政策などと関係をしているのかもしれない。「森の幼稚園」のような市民立的幼稚園などの開設への市民の機運が、意外と弱いのかもかもしれない。しかしこれは憶測にすぎず、今後検討を要する課題である。



また南ドイツにあるバイエルンとバーデン＝ヴュルテンベルク州は、「森」が豊かにあることが、開設数の多さと関係している。

以上の結果から、確実にドイツ国内における「森の幼稚園」の数は、増大しつつあると考えてもいいだろう。

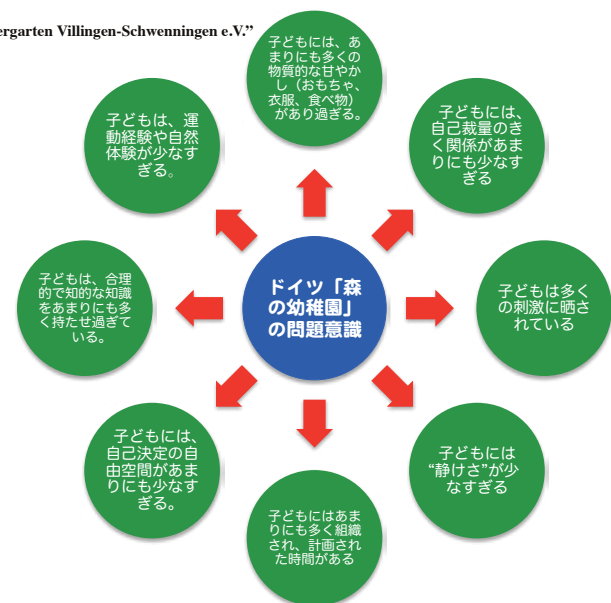
V. 「森の幼稚園」の問題意識と意義

(1) 「森の幼稚園」の問題意識

「森の幼稚園」が如何にして、ドイツ国内で広がるのかを考えたい。これはすでに事あるごとに、何度となく触れてきたことであるが、今日、子ども達が置かれている文明の発展によりもたらされた恩恵にある。恩恵というのは、便利さであったり、効率であったり、住みやすさであったりするが、その事が、逆に人間が成長する上で、弊害をもたらす結果となっている。

左図は、「森の幼稚園ビーリングン＝シュベニンゲン」("Waldkindergarten Villingen-Schwenningen e.V.")

"Waldkindergarten Villingen-Schwenningen e.V."



35

Villingen-Schwenningen e.V.") の現代の子ども達を取り巻く問題状況として挙げられた諸要因である。

- (1) 子どもには、あまりにも多くの物質的な甘やかし（おもちゃ、衣服、食べ物）があり過ぎる。
- (2) 子どもには、自己裁量のきく関係があまりにも少なすぎる。
- (3) 子どもは、多くの刺激に晒されている。
- (4) 子どもには、静けさが少なすぎる。

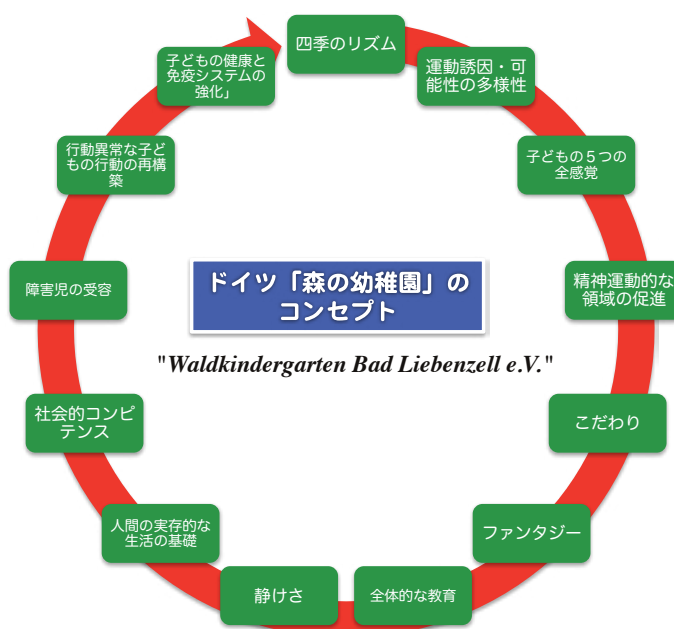
- (5) 子どもには、あまりにも多く、組織された・計画された時間がある。
- (6) 子どもには、自己決定の自由空間があまりにも少なすぎる。
- (7) 子どもは、合理的で、知的な知識をあまりにも多く持ちすぎている。
- (8) 子どもは、運動経験が少なすぎる。
- (9) 子どもは、自然体験が少なすぎる。

ここで挙げられている要因は、ドイツだけに限らない現代文明社会に蔓延る人間疎外の要因でもある。とくに、「自己裁量のきく関係」、「自己決定の自由空間」「運動経験」「自然体験」が少ないことは、逆に「組織され・計画された時間」「合理的な知識」が多すぎるということである。社会が発展し、道筋が見え、起こりうるものが予想しうると考える因果的線形的な考えが、教育獲得目標となり、それが当たり前の如く正しいと考え、想定しえないことを想定する壮大なイマジネーションの力を軽視する結果をもたらしている。現代文明は、子ども達のからだだけでなく、知性の在り方すらも決定している。時に、ヨーロッパ社会は、自然と共存を曲がりなりにも目指したアジア社会と異なり、かつて森を切り開き、自然を破壊し、今日の都市国家を築いてきた歴史的な経緯がある。森の再生、自然への回帰は、その反省の結果であろう。自然環境の再生の道は、人間性回復の道でもある。

(2) 「森の幼稚園」のコンセプト

以上のような問題意識から、幼児期の子どもにとって「森の幼稚園」の存在は、大きいものであることは明らかである。「森の幼稚園」という自由空間の中で子ども達に育もうとすることも明らかである。何度となく取りあげてきた。「森の幼稚園バード・リーベンツェル」(Waldkindergarten Bad Liebenzell e.V.) のコンセプトによれば、

- 1、「四季のリズム」
- 2、「運動誘因・可能性の多様性」
- 3、「子どもの5つの全感覚」
- 4、「精神運動的な領域の促進」
- 5、「こだわり」
- 6、「ファンタジー」
- 7、「全体的な教育」
- 8、「静けさ」(Klanglandschaft)
- 9、「人間の実存的な生活の基礎」
- 10a、「社会的コンピテンス」
- 10b、「障害児の受容」
- 10c、「行動異常な子どもの行動の再構築」
- 11、「子どもの健康と免疫システムの強化」



36

が挙げられている。さらに、今はもう廃園

となっているが、筆者らが最初に訪問した「森の幼稚園アウグスブルク」(Waldkindergarten Augsburg) のコンセプトを挙げれば、以下の通りである。

- 1、子ども達は、自然を全面的に意識的に体験する
- 2、“風と雷雨”に晒されているという満身の生きる喜びが、免疫システムを最大に強める。

- 3、子ども達は、遊んだり、はしゃぎ回ったり、夢見たりする無制限の場所をもっている。
- 4、そこには前もってしつらえての遊ぶものがないので、創造性やファンタジーが刺激される。
- 5、集団は、小さい。
- 6、森の中では、子ども達の全感覚が、自然にそして全面的に刺激される。この事が知的な仕事をする際にも集中力を何よりも育成する。
- 7、知能と社会的コンピテンスが、育成される。

以上のコンセプトから「森の幼稚園」の実践において重要視している視点が浮かび上がってくる。幼児期の活動における五感の重視、巡り来る四季の変化への感覚的・身体的・認識的な気づき、免疫・健康の促進、集中・こだわり・静粛の意義などである。既存の園舎による教育の中では、なかなか得難い質であろう。筆者は、さらに「森の幼稚園」の実践に通して、学ぶことのできる視点として、(1)「ドアと壁のない」ということが子どもや教師の行動へ与える影響—線形的因果論の克服、(2)

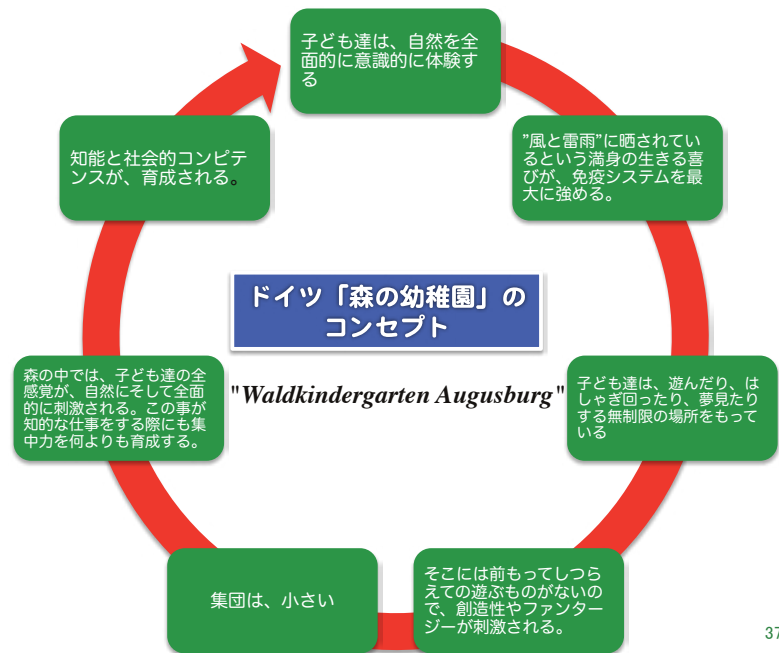
自然の中で起こる偶然的な出来事的重要性—不確実性の哲学、(3) 自然的「恩物」の多様性、(4) アニミズムの復権—物語を紡ぐ、意味の形成、(5) 自然体験のもつ子どもの想像性や後の学習の基礎(可能性)、(6) 失われてきた子どもの内にある「自然」の回復—からだ、情動(喜怒哀楽)、知的なものの基礎などが重要ではないかと考える。

VI. 「森の幼稚園」の実証的研究

昨今の保幼小連携の中で指摘されるように、小学校では、子ども達が、保育園あるいは幼稚園で出身であるかどうかによって、育ちの違いが大きく、難しさを感じると言われ、従って、連携を強め、接続を滑らかにするという取組がなされている。保育園にしても幼稚園にしても、さらに自由保育(「大地の保育」、「待ちの保育」、「どろんこ保育」など)やモンテッソーリ教育、ピアジェ理論に基づく幼年教育など多種多様な実践が行われ、その成果も実の所多様であるし、またはっきりと確かめられていないのが現状である。

少なくとも、就学前施設は、小学校の準備機関でなく、それぞれがそれぞれの就学前期の意義のある「生活」を送るためにある。「子どもには子どもの時間を返せ」というスローガンがあるが、子ども時代は、子どものための時間であって、充実した時間を過ごすことが何よりも優先されるべきだろう。

しかし現実的には、「森の幼稚園」のようなカリキュラムに沿わない、あるいはイメージ的なカ



37

リキュラムに対応して保育がなされるとなると、小学校を意識した危惧が生まれることもうなずけることである。そこでどういう育ちをしているのかを知りたいとして、調査を企画することはあながち間違いではないだろう。

今回紹介する実証的研究は、すでに旧知のものとなっているが、この領域における実証研究が少ないなか、意義はあると考える。その研究は、2002年に博士論文としてハイデルベルク大学へ提出されたペーター・ヘフナー（Peter Häfner 2002）の研究である。題目は、「ドイツにおける自然・森の幼稚園—就学前教育における通常の幼稚園とのアルターナーティフ（Natur-und Waldkindergärten in Deutschland - eine Alternative zum Regelkindergarten in der vorschulischen Erziehung.）」である。本研究の問題意識は、（１）「就学前施設としての「森の幼稚園」に通った子どもは、通常の幼稚園に通った子どもと同じように学校に備えられているのであろうか？」、（２）「子どもが、「森の幼稚園」に通った経験があると、第一学年に問題があるのであろうか？」である。彼の意識の中には、就学前教育施設における教育の在り方が、就学能力（schulfähigkeit）とどう対応しているのかという課題がある。

彼は、ドイツ国内（Baden-Württemberg、Freistaat Bayern、Rheinland-Pfalz、Niedersachsen、Schleswig-Holstein、Nordrhein-Westfalen、Freie und Hansestadt Hamburg、Hessen など八州）の48カ園を選び、「森の幼稚園」の子ども230人、通常の幼稚園114人を対象として、小学校一年担当の教員に42項目のアンケート調査をした。

彼の仮説は、以下のとおりである。

- 〔仮説1〕「動機—集中—忍耐の領域において、「森の幼稚園」に通った子ども達は、通常の幼稚園に通う子ども達より、より良い数値を示すだろう」
- 〔仮説2〕「社会的能力において、「森の幼稚園」に通った子ども達は、通常の幼稚園に通う子ども達より、高いであろう」
- 〔仮説3〕「授業の中で協同作業をする場合、「森の幼稚園」に通った子ども達は、通常の幼稚園に通う子ども達より、高い値を示すだろう」
- 〔仮説4〕「芸術的才能の領域にあっては、「森の幼稚園」に通った子ども達は、通常の幼稚園に通う子ども達より、より良い値を示すだろう」
- 〔仮説5〕「認知的領域にあって、「森の幼稚園」に通った子ども達は、通常の幼稚園に通う子ども達より、より良い値を示すだろう」
- 〔仮説6〕「身体的な領域やスポーツ分野では、「森の幼稚園」に通った子ども達は、通常の幼稚園に通う子ども達より、より良い値を示すだろう」
- 〔仮説7〕「森の幼稚園」に通った子ども達は、通常の幼稚園に通う子ども達より、学校においては、より静かに座っているだろう」
- 〔仮説8〕「森の幼稚園」に通った子ども達は、通常の幼稚園に通う子ども達より、指や手の器用さを持っているだろう」
- 〔仮説9〕「森の幼稚園」出身の子どもは、粗大運動をするにあたって、通常の幼稚園出身の子どもよりも、より良い調整ができるだろう」
- 〔仮説10〕「森の幼稚園」に通った子ども達は、通常の幼稚園に通う子ども達より、他の子ども達と一緒に協力して仕事ができるだろう」
- 〔仮説11〕「森の幼稚園」に通った子ども達は、通常の幼稚園に通う子ども達より、実物授業の分野において、より良い値を示すだろう」
- 〔仮説12〕「書き取りの授業では、「森の幼稚園」に通った子ども達は、通常の幼稚園に通う子ども達より、より良い評価が為されるであろう」
- 〔仮説13〕「他の子どもとの葛藤は、「森の幼稚園」に通った子ども達は、通常の幼稚園に通う子ども達より、友好的に解決することができるだろう」
- 〔仮説14〕「男の子と女の子は、程度においても、やり方においても、「森の幼稚園」や通例の幼稚園からの影響は異なるだろう」

アンケート調査の項目は、大凡、以下の通りである。

- 1) 認知の領域（7項目）—「子どもは、課された課題を自主的に解決する」（F2）、「子どもは色、形、大きさを区別できる」（F6）
- 2) 社会的領域（9項目）—「子どもは、他の子どもと協力して協同活動ができる」（F2）
- 3) 動機—意志の領域（8項目）—「忍耐をもって課題を仕上げる」（F3）、「子どもは、授業で良く質問する」（F5）
- 4) 身体の領域（3項目）—「子どもは、指や手の巧緻さを巧みに使う」（F9）、「子どもは、よく病気になる」（F33）

- 5) 一般的な質問(4項目) — 「子どもは、想像的である」(F4)、「子どもは、静かに座っている」(F23)
6) 個々の分野に関しての質問(8項目) — 「スポーツ分野」(F35)、「数学の分野」(F38)

アンケート調査の結果は、通常の幼稚園に通っていた子どもより、「森の幼稚園」に通っていた子どもの方が全ての領域で成績が良いことが明らかとなった。

この結果は、「森の幼稚園」の実践者にとっては、実践への信頼と自信を与えたであろうことは疑いもない。この研究が、PISA 試験のお粗末な結果に、言葉や知識偏重の教育へ転換させようとする動向に歯止めをかけ、その後の「森の幼稚園」の増大に拍車を掛けたのではないかと考える。

しかしこの種の実証研究には、この結果が、即実践の成果であると判断していいかどうかは、単純には言えないのではないかということも理解しておかなくてはならないだろう。なぜなら遠い未来において花開くであろう素地のようなものを育てている可能性の方が大きいからである。

VII. まとめにかえて — "The Sense of Wonder"

「森の幼稚園」の実践を通して、子ども達に育みたいことは何か？自然の中で育む事とは何か？それは、きっと"The Sense of Wonder"ではないかと考える。この意味深遠な言葉は、*Rachel Louise Carson* (1907.5.27 ~ 1964.4.14) の遺書とでも言えるもので、自然とふれあうことを通して、学ぶであろう感性である。拙論を終えるにあたって、最後に、カーソンの珠玉の言葉を引用して、終えたいと思う。

「子ども達の世界は、いつも生き生きとして新鮮で美しく、驚きと感激にみちあふれています。残念なことに、わたしたちの多くは大人になるまえに澄みきった洞察力や、美しいもの、畏敬すべきものへの直感力をにぶらせ、あるときはまったく失ってしまいます。

もしもわたしが、すべての子どもの成長を見守る善良な妖精に話しかける力をもっているとしたら、世界中の子どもに、生涯消えることのない「センス・オブ・ワンダー＝神秘さや不思議さに目を見はる感性」を授けてほしいとたのむでしょう。

この感性は、やがて大人になるとやってくる倦怠と幻滅、わたしたちが自然という力の源泉から遠ざかること、つまらない人工的なものに夢中になることなどに対する、かわらぬ解毒剤となるのです」(23)

「わたしは、子どもにとっても、どのようにして子どもを教育すべきか頭をなやませている親にとっても、「知る」ことは「感じる」ことの半分も重要ではないと固く信じています。

子どもたちがであう事実のひとつひとつが、やがて知識や知恵を生みだす種子だとしたら、さまざまな情緒やゆたかな感受性は、この種子をはぐくむ肥沃な土壌です。幼い子ども時代は、この土壌を耕すときです。」

「美しいものを美しいと感じる感覚、新しいものや未知なものにふれた時の感激、思いやり、憐れみ、賛嘆や愛情などのさまざまな形の感情がひとたびよびさまされると、次はその対象となるものについてもっとよく知りたいと思うようになります。そのようにして見つけた知識は、しっかりと身につきます。消化する能力がまだそなわっていない子どもに、事実をうのみにさせるよりも、むしろ子どもが知りたがるような道を切りひらいてやることのほうがどんなにたいせつであるかわかりません」(26)

「地球の美しさについて深く思いをめぐらせる人は、生命の終わりの瞬間まで、生き生きとした精神力をたもちつづけることができるでしょう。鳥の渡り、潮の満ち干、春を待つ固い蕾のなかには、それ自体の美しさと同時に、象徴的な美と神秘がかくされています。自然がくりかえすリフレイン — 夜の次に朝がきて、冬が去れば春になるという確かさ — のなかには、かぎりなくわたしたちをいやしてくれるなにかがあるのです」(59)

〔参考文献〕

- (1) レイチェル・カーソン（高遠訳）『センス・オブ・ワンダー』
- (2) Ingrid Miklitz(2001). Der Waldkindergarten, Dimensionen eines pädagogischen Ansatzes. Luchterhand.
- (3) Hans-Georg Schede(2000), Der Waldkindergarten auf einen Blick. Herder
- (4) Kirsten Bickel(2001), Der Waldkindergarten. Nordenmedia.
- (5) Häfner, Peter(2002): Natur-und Waldkindergarten in Deutschland eine Alternative zum Regelkindergarten in der vorschulischen Erziehung. Diss. Uni. Heidelberg http://archiv.ub.uni-heidelberg.de/volltextserver/volltexte/2003/3135/pdf/Doktorarbeit_Peter_Haefner.pdf
- (6) 百合草禎二 2002「ドイツ『森の幼稚園』の実践と子どもの発達—森の中で育つ子ども」『常葉学園短期大学紀要』第33号 135-165頁
- (7) 杉村伸一郎他「自然体験を通じた幼児の〈育ち〉と〈学び〉に関する検討」広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要、第37号 2009、3
- (8) 中西・中坪・境、2010「森の幼稚園カリキュラム」における幼児と自然との相互作用に関する研究—他者とのかわりにみる幼児の変容プロセス—」広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部 第59号 167-174,
- (9) 中坪・久原・中西・境・山元・林・松本・日切・落合、2011「アフォーダンスの視点から探る「森の幼稚園」カリキュラム—素朴な自然環境は保育実践に何をもたらすのか—」広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要〈第39号 2011.3〉
- (10) 東方真理子「ドイツの「森の幼稚園」の実態に関する調査研究」恵泉アカデミア 9, 124-96, 2004-12
- (11) 東方真理子「森の幼稚園における自然とふれあうことの意味」東京大学大学院新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻（修士論文）
- (12) 佐藤史浩・磯部裕子（2010）「Waldkindergarten - ein pädagogischer Ansatz—森の幼稚園—教育的な試み—」『宮城学院女子大学発達科学研究』
- (13) Bundesverband der Natur-und Waldkindergärten in Deutschland: <http://www.waldkinder.de/Schutzgemeinschaft>

〔謝辞〕

故大場幸夫先生（元大妻女子大学長）は、何よりも筆者が本研究に取りかかるきっかけを与えてくれ、また貴重なドイツの「森の幼稚園」のビデオを貸して頂き、心から感謝申し上げます。